

# 観点別評価を行うための評価方法と評価問題の開発

- 「A問題」, 「B問題」を利用して -

京都府城陽市南城陽中学校 竺沙 敏彦

## 1. はじめに

中学校において新学習指導要領が平成14年度から完全実施された。今回の改訂で、学習の評価が目標に準拠した評価に変わった。

国立教育政策研究所(2002)は、観点別評価を行う手順として次のように示している。

(前略) ~まず「おおむね満足できる」状況(B)か、「努力を要する」状況(C)かを判断した上で、さらに「おおむね満足できる」状況(B)と判断されるもののうち、児童生徒の学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていると判断されるものを「十分満足できる」状況(A)とすることが適当であると考え。(p.17)

また、根本(2002)は、「B以上と判断されるもののうち、質的あるいは量的な高まりがあると判断されるものをA」(p.31)(下線部は筆者が追加した)とするとしている。

これらの考えに基づき、筆者は「B」と「C」とを判断するための問題(B問題とよぶ)、及び「A」と「B」とを判断するための問題(A問題とよぶ)を用いて評価活動を実践した。

本稿においては、A問題・B問題を用いた評価方法の提案とそれらを用いた実践報告を行う。

## 2. 研究の内容

国立教育政策研究所(2002)は、学習指導要領をもとに観点別評価のための評価規準を示している。例えば、2次方程式の単元において数学的な表現・処理の観点について「B」と「C」とを判断するための規準は「因数分解や平方根の考えを利用して、簡単な二次方程式を解くことができ、その手順を説明することができる。」としている。これをもとにB問題を作成した。B問題の一例として「 $x^2 + 6x + 8 = 0$ を解く」という問題があげられる。B問題の正答率がある一定の割合(例えば60%)を越えた場合に「B」と判断し、越えなかった場合は「C」と判断する。

次に「A」と判断するための手順を示す。ある観点について「A」と判断できる生徒の状況は様々である。多くのB問題を短時間でミスなく正答できる生徒(量的な高まり)もいれば、B問題では要求していない方法を用いて解かなければならない問題を正答できる生徒(質的な高まり)もいる。

そこで、B問題についてある一定の割合(例えば80%)を越えた場合には「A」と判断する。

また、「B」の評価規準を越えた規準を設定し、それを達成しているかどうかを判断するためのA問題を作成した。例えば、「 $x^2 + 3x - 8 = 0$ を解く」が考えられる。B問題である一定の割合を超えて「B」と判断され、A問題のある一定以上の割合で解くことができた場合「A」と判断する。

これらを整理すると表1のようになる。なお、は正答率がある一定の割合(例えば60%)を超えた場合、はそれに達しなかった場合、はよりも高い割合(例えば80%)を超えた場合である。

(表1)

|     |  | B問題 |   |   |
|-----|--|-----|---|---|
|     |  |     |   |   |
| A問題 |  | C   | B | A |
|     |  | C   | B | A |
|     |  | C   | A | A |

(表2)

|     |  | B問題 |    |    | 計   |
|-----|--|-----|----|----|-----|
|     |  |     |    |    |     |
| A問題 |  | 31人 | 11 | 4  | 46  |
|     |  | 4   | 12 | 9  | 25  |
|     |  | 2   | 16 | 48 | 66  |
| 計   |  | 37  | 39 | 61 | 137 |

これをもとに中学3年生2学期中間試験(平成14年10月実施)において、2次方程式の単元で観点「数学的な表現・処理」の結果を示したものが表2である。

## 3. 研究のまとめ

本研究において、A問題・B問題を活用して評価活動を行った。しかし、A問題・B問題の妥当性や判断するための正答率の妥当性は今後の課題である。

参考文献国立教育政策研究所(2002)、「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」根本博(2002)、「数学教育における評価・『評価規準』作成の意義」,第84回全国算数・数学教育研究(兵庫)大会講習会テキスト